

## 後拾遺和歌集私注(4)

柏木由夫

おなじ屏風に大饗のかたかきたるところをよみはべりける

入道前太政大臣

17 きみませとやりつるつかひきにけらしのべのきぎすはとりやしつらん

【訳】 今日の大饗へ来られるようにと遣した請客使が戻ってきたよ  
うだ。もてなしにする雉はもう用意できたのだろうか。

【校異】 かたかきたる↓㊦かたはかきたる よみはへりける↓㊦よ  
める 入道前太政大臣↓㊦入道前太政大臣

【他文献】 栄花物語卷十三(「木棉四手」初句「君がりと」)、古来  
風躰抄下卷(初・再)。

【注】 抄注(「歌学大系」別卷四所収本文による)―大臣の大饗ニハ  
上客料理所ニ雉ヲスハエニツケテ捐レ之。是為ニ尊者一也。其鳥ハ御鷹  
飼ノ今日野ニユキテトリテ犬飼等アヒグシテカハボウシ、カハバカ  
マキテモチマキリテ、オマヘワタリテ纏頭アツカルナリ。サテ尊者ヲ  
請ジニヤリツルツカヒハカヘリニケリ。野ニテトリハトリヤシツラム  
トイフガ、シカルコ、ロヲヨマレタル也。御鷹飼ハ隨身也。左右ニ各  
三人、アハセテ六人也。当時ハ下野氏ニ五人、中臣氏ニ一人アリ。大  
臣大饗ニハ一人イル也。其人ト云事ハ、便ニシタガヒ緑ニヨルナリ。  
集抄―是は大饗に、公卿等参集して、尊者のもとに使たてらるゝ事也。

江次第云、主人着<sup>ツイテ</sup>親王座<sup>シノノ</sup>遣<sup>ツカハス</sup>掌客使<sup>シツ</sup>。四位又云、尊者二人ある時は、  
二人の使を召す。仰せて云、それがしの大殿にまゐりて、上達部まう  
で給ひにたるよし申さしめよと云々。仰を承て、馬にのりて中門には  
せまゐりて申さしめて、すなはち尊者の前軀を奉仕す云々。是をやり  
つるつかひ来にけらしとよみ給ふにや。のべのきぎすはとりやしつら  
んとは、是も大饗にある事也。江次第云、鷹飼渡<sup>ト</sup>西の幔門<sup>マニ</sup>より入て、  
庭中に渡る犬飼相具す立作の所の人進出で、雉をとりて軀のひつじさ  
るの角の上にさしはさむと云々。このありさまなるべし。存疑なし。

【語釈】 〆おなじ屏風V16の語釈参照。

〆大饗のかたV「大饗」の儀式次第については『平安朝の年中行事』  
や『江家次第』に詳しい。「大饗」を詠んだ屏風歌としては、14の評  
で掲げた兼盛集I120のほか、

撰政家屏風 大臣大饗会所楽舞有所拜礼

祭主輔親

よろづよの舞の袖ふるやどにこそあるじたづねてもろ人もくれ

(夫木抄 卷第卅六 16822)

が知られる。

〆君ませとV『江家次第』にある請客使の詞「今日有<sup>ニ</sup>大饗、若令<sup>レ</sup>過給  
如何」に当る。「坐<sup>マ</sup>す」は「行く」「来る」の尊敬語。「君ませ」は万  
葉集(卷二112、同114)以来和歌に詠み込まれているが、

君まさで煙たえにし汐がまのうら寂しくも見え渡るかな(古今

哀傷 852 貫之)

のように、打消が続いて人との死別か生別の状況を詠む場合が多く、そうした詠み方にとらわれないものとしては、後拾遺集で例外的に17とともに、

梅が香をたよりの風や吹きつらん春めつらしく君がきませる (春上 50 兼盛)

が見える。17は、すでに掲げた、大饗を詠んだ

ひきつれて大宮人のきませれば春うれしくもおもほゆるかな (兼盛集 120)

に倣っているとも思われる。

へやりつる使々尊者のもとに向けられた請客使。歌中の例としては万葉集が主である。

情者千遍敷及雖念使乎將遺為便之不知久 (卷十 2557)

人事 茂君 玉梓之使不遺忘跡思名 (同 2591)

へ来にけらし「けらし」は「助動詞『けり』に助動詞『らし』の付した『けるらし』の変化したものである。一説に『けり』が形容詞的に活用したものと(1)過去の動作、状態を比較的確実な根拠に基づいて推量する。(日本国語大辞典)とされ、用例は万葉集以来見られるが、後の時代の、

桜花咲きにけらしなあしひきの山の峽より見ゆる白雲 (古今 春上 59 貫之)

おきつ風吹きにけらしな住吉の松のしづえをあらふ白波 (後拾遺集 1064 経信)

などや、「ほのほのと春こそ空に来にけらし」(新古今 春上 2 後鳥羽院)のように、万葉集的な蒼古さ、雄大さ、悠揚感を含む感動を意識的に表現上で求めたと思われるものが少なくない。

へ野辺の雉「雉」は春の歌材として詠まれることが多い。春の野にあさるきぎすのつまごひにおのがありかをひとにしれつ

つ (拾遺 春 21 家持)

御狩野にまだふる雪はきえねども雉の声は春めきにけり (能因集 239)

能因の歌のように雉の声が春の訪れを実感させることもあり、大饗の時雉が供されるのも初春の行事だからだろう。大饗での雉の扱いについては、

……御鷹飼来立作所、献鳥、(北山抄)

鷹飼渡、入自西院門渡庭中、大飼相具、西到立作所、立籠乾、立作所人進出取、雉、押籠坤角上、鷹飼者押角胡床

家次第)

よしふさのおとどの大饗にや、……雉足はかならずもる物にてありけるをいかげしけん、そんじやの御前にとりおとしてけり。(大鏡 卷二)

などとあり、「年中行事絵巻」卷十(『日本絵巻大成』8所収の「住吉家模本」に依る)には「大饗」の折、騎馬姿の鷹飼とともに雉の羽根を差した壺を捧げる童子の姿や、料理のため設けられた幄舎が描かれ、又同じく別本卷二には幔門を通り抜け、柴の枝に雉を結びさげ持つ鷹飼の姿などが描かれている。

【評】 17は「抄注」や「集抄」にもあるように、儀式の中でも大臣家から遣わされた請客使という使の要請に応じて、尊者すなわち親王・公卿等が大臣家に到着し、そのもてなしの中で雉羹が供されるといふ次第に基づいて、それを大臣家の主人の立場から詠んでいる。この頼通大饗の折の道長については、「栄花物語」に次のように見える。

「我も詠まん。」とおほせられて、世の急ぎに御いとまもおはしませねど、端近にうちながめて、うめかせ給ふほどさまさまにめでたく、人の御身の幸、御心さまも常の事ながら、かばかり急がしき御心におぼし忘れさせ給はぬ御心の程も聞えさせん方なくおはします。

この記述について山中裕氏は、「大饗の儀そのものより道長のすぐれている点に重きをおいて書いている」(『平安朝の年中行事』P 313)と

述べられているが、この大饗の行われた前年の寛仁元年には、頼通が摂政となり、三条院皇子敦明親王が東宮を退き、翌二年には娘彰子（太皇太后）、妍子（皇太后）、威子（中宮）、嬉子（尚侍）が妃の位を独占するという道長一家の絶頂にさしかかる時であり、道長の精神的充実と高揚を17の背景に読み取ることも可能だろう。

表現の上からは、語釈に述べたことを合わせると、上句の各語に万葉集以来の古めかしい語が用いられていることに注意される。それは一首を重々しくゆったりした落ち着きと肅然たる趣きあるものに構えようとするのが、作者の大きなねらいであることを示しているのだと思われる。

民部卿泰憲近江守にはべりける時、三井寺にて歌合しはべりけるに 読人不知

18 はるたちてふるしらゆきをうぐひすのはなちりぬとやいそぎいづらん

【訳】 立春を迎えても降っている白雪を、鶯は花が散ったのかと間違えて急いで谷から出てくるのだろうか。

【校異】 近江守に↓㊦㊧あふみのかみにて はへりけるに↓㊨㊩㊪㊫

【他文献】 難後拾遺（歌略）うぐひすは、はるはなのをりなくものなれども、しはすによりてたによる出るといふ事のあらばこそかくはよまめ。されば、もとのころにはあらずきこゆるはいかが。

【注】 抄注、存疑なし。集抄「咲比にさへ出べき鶯の、新雪を花ちると見て、いそぎて幽谷より出らんと也。

【語釈】 八民部卿泰憲……三井寺にて歌合「平安朝歌合大成」四の「一五二 天喜元年五月近江守泰憲三井寺歌合」を参照。

八春立ちて立春になっても降る雪を落花に見立てる歌としては、春立ちて猶ふる雪は梅の花咲く程もなく散るかとぞ見る（拾遺

春8 躬恒）

などであり、春の花を待つ鶯ということでは、

春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯ぞなく（古今 春上

6 素性）

春立てど花もにははぬ山ざとはものうかるねに鶯ぞなく（同 同

15 棟梁）

がある。素性の歌は白雪を花と見立てる点で18に近い発想がある。

八降る白雪V和歌の用例としては、積もることへの注目もあるが、

かきくらしふる白雪の下消えにきえて物思ふ頃にもあるかな（古

今 恋二566 忠岑）

のように、消えることへの注目のほうが多い。

降る白雪の花への見立ては、

春ちかく降る白雪はをぐら山峯にぞ花のさかりなりける（後撰

冬502 不知）

春こねど草木に花のさくことはふる白雪のかかるなりけり（六帖

第一704）

などある。

八花散りぬとやV「花散る」とは万葉集以来橘の花についての場合が多い。

橘之花散里乃翟公鳥片恋為乍鳴日四曾多寸（卷八1473 旅人）

橘の香をなつかしみほととぎす花ちる里を尋ねてぞ訪ふ（源氏物語 花散里）

他に春の終わりを示す場合などもあるが、落花を惜しむ鶯を歌うものとしては、

花の散ることやわびしき春霞立田の山の鶯の声（古今 春下108

後蔭）

しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみ散る花ならなくに（古

今 春下110 躬恒）

かたをかのみかきの原の鶯は花ちりぬとやねをばなくらむ（中務

集一77)

などが見られる。

△急ぎ出づらむ▽鶯が冬の間籠っていた谷から出て来ることをいう。

鶯の谷よりいづる声なくは春くることをたれかしらまし(古今

春上14 千里)

【評】 18の内容を分析すると、春の雪、雪と花の見立て、花を待つ鶯、落花を惜しむ鶯が、発想の構成要素であり、それが密接に重なって一首に出来上っていると知られ、それらのいくつかの例を語釈に示した。以下、補足を含めて鶯を詠み込んだ歌に限定しつつ少し述べてみる。これらの要素の中で、花を待つ鶯は残雪の鶯と同価とも言えよう。すなわち、

梅が枝に来る鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ(古今

春上5 不知)

は雪の降る中にかかわらず、梅の花の咲くことを積極的に待ち望み鳴く鶯を歌うが、これを表現上一步退ければ、

雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今や解くらむ(古今 春

上4 二条后)

鶯のまだものうげに鳴くなるはけさもこずゑに雪や降るらん(重之女集6)

のように、まだ雪の勢力が衰えない時の鶯となる。又、一方これを一步進めれば、前掲の素性の歌のように雪を花と見立てて、その中でも鳴く鶯の歌となる。たとえば、

鶯はあざむかるらん白雪の花とみるまで枝に降れば(興風集II

29)

鶯は鳴きそめぬるを梅の花色まがへとや雪の降るらん(貫之集I

295)

人しれず声ふりたつる鶯は雪をや梅の花とみるらむ(元輔集III

140)

などのようになるのである。

しかし、18の場合雪を待っている花に見立てているが、それが落花である点で右に挙げたものと区別される。落花の鶯ですでに挙げた二首はともに古今集春下に属し、春の終わりを惜しむ趣のものとなっている。落花の鶯を歌う例には、他にも、

梅花ちるてふなへに春雨のふりでつつなく鶯の声(後撰 春上40 不知)

我が宿に驚いたくなくなるは庭もはだらに花やちるらん(金葉三奏本 春11 兼盛)

きつつのみ鳴く鶯の故里は散りにし梅の花にぞありける(新勅撰

春上36 是則)

散る花を惜しむとやなく鶯のをりしれりとも見ゆる春かな(重之集III)

などを挙げられる。これらを18と比較すると、18が梅の花の咲き始める時を一举に越えて、落花の時期を想定して詠んでいる点で特色になっているとわかる。

「難後拾遺」では、「鶯は春花のをりなくものなれど、もと花によりて谷より出るなどといふことのあらばこそかうは詠まめ……」(前掲の「他文献」で示した本文は『難後拾遺集成』所収の「竜氏旧蔵契沖本」本文を大字で、「神宮文庫本」本文を右傍に小字で示したが、今は「神宮文庫本」本文による。)とあって、18は鶯の本意にはずれると比難する。たしかに花の咲く以前の雪の中ですでに鶯は鳴くと歌われているのだから、その時鶯は谷を出ているわけである。経信の歌に、

氷解く風の音にやふるすなる谷のうぐひす春をしるらむ(経信集 I 4)

とあるが、これは解氷で春を知って鶯は谷を出ると歌っており、前掲の古今集14を踏まえていると思われるが、とにかく経信が鶯が谷を出るのは花によるのではないと考えている一証左にはなるだろう。しかし、すでに挙げた多くの例でも鶯の花を待つ心は明らかであり、又、

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる（古今  
春上13 友則）

でも花を求めて鶯は訪れてくることを前提に詠まれており、経信の  
「もとの心」は彼の好みや観念によって、実際例の中でも偏りを持っ  
たものと考えなければならぬだろう。

うぐひすをよみはべりける

大中臣能宣朝臣

19 やまたかみゆきふるすよりうぐひすのいつるはつねはけふぞなく  
なる

【訳】 山が高いので、まだ雪の降っている古巢から鶯が出て来ては  
じめての鳴き声は、やっと今日になって立てているよ。

【校異】 やまたかみ↓山ふかみ けふそなくなる↓<sup>㊦</sup>けふそき  
↓つる<sup>㊧</sup>けふそなきける

【他文献】 能宣集169（詞書 うぐひす 初句「山ふかみ」四句「は  
つねは」）、同集157（詞書 鶯）、同集159（詞書 うぐひす 四句

「いつるはつねを」）、明題和歌全集（春部上265「四四 鶯」）。

【注】 抄注、存疑なし。集抄―雪降をいひかけて也。詩に出<sup>イ</sup>自<sup>イ</sup>幽<sup>イ</sup>  
谷<sup>イ</sup>遷<sup>イ</sup>于<sup>イ</sup>喬<sup>イ</sup>木<sup>イ</sup>黄<sup>イ</sup>鳥<sup>イ</sup>の詩也。山ふかみ、雪古巢におのづから幽谷の心  
あるべし。心は明也。

【語釈】 山高みV和歌に数多くの例があるが、特に初句でこの句  
を含む歌によって、この句の示す状況を以下に挙げると、地上からは  
るかな高さとして「雲居」（古今 賀<sup>358</sup> 素性）「空」（道命集295）と  
仰ぎ見られる位置とし、「霞」（後拾遺 春上38 正言）や「雲」（道  
済集298）よりも高く、「霧」（赤人集11）が降り、「嵐」（古今 物名  
446 利貞）が常に吹き下ろすところとされている。したがって「人も  
こず」（兼澄集解題）、人々の往来居住する地上とはかけ離れていると  
される。そうしたところでの雪は、「めづらしげなく降る雪」（躬恒集  
V 227）であり、「いく年積める雪」（高遠集311）である。そして鶯につ

いても、

山高み降りくる霧にむすばれて鳴く鶯の声まれらなり（赤人集1  
1）

とされる。このように「山高み」で指示される状況は、普通の人々の  
生活範囲から彼方の世界と見なされている。それは19の場合に限れ  
ば、人里と隔たった雪深いところであることを強調していることにな  
るだろう。

へふるすV「ふる」は雪が降ること古巢の掛詞。鶯の古巢は、

鶯はこづたふ花の枝にても谷の古巢を思ひ忘るな（詞花 恋下259  
律師仁祐）

のように谷にあるものとされる。19も高い山から降り積った雪にとど  
された谷の古巢を詠んでいると思われる。又、

鶯のこぞのやどりの古巢とや我には人のつれなかるらむ（古今  
俳諧歌1046 不知）

のように、古びた所では縁のないところとも詠まれるが、むしろ仁  
祐の歌に「古巢を思ひ忘るな」とあったり、

鶯は花の都も旅なれば谷の古巢を忘れやはする（詞花 恋下260  
行尊）

雲の上をならはざりける鶯はもとの古巢を恋ひぬ日ぞなき（定頼  
集146）

とあるように、古くからの馴染みの所で、そこを離れても執着を持つ  
べきところとされることのほうが主に詠まれる。そうした古巢の温も  
りの中で冬の間もっていた鶯が、

氷解く風の音にや古巢なる谷の鶯春をしるらむ（経信集14）

のように春を迎えるとは、春の到来による新生を意味しているとも思  
われ、19の場合もそのように読み取り得るように思う。

へ出づる初音V「出づる」はこの場合、都あるいは里という人々が生  
活している所へと向かうこと。  
今ははやみ山を出でて時鳥け近き声を我に聞かせよ（後撰 恋五

鶯の初音ほのかに足びきの山辺飛び出づる声きこゆなり（忠見集  
175）

「初音」は、

あさ緑春立つ空に鶯の初音を待たぬ人はあらしな（続後撰 春上  
15 貫之）

たまさかにわが待ちえたる鶯の初音をあやな人やきくらむ（詞花  
春4 道命）

のように人々に恋い待たれ、それを聞く人々の立場から詠まれること  
が多い。

へけふぞ鳴くなる「なる」は終止形接続の助動詞。これについて竹  
岡正夫氏は、

野辺ちかくいへみしせればうぐひすのなくなるこゑはあさなあさ  
ななく（古今 春上16 不知）

の「なる」の説明の中で、

……そしてそのような判定の結果を再び対象界に措定して、その  
判定が話手の単なる主観によるものではなく、対象界に則しての  
表現であるとして、この「なり」を添えて表現に客観性を持たせ  
るのである。例えば、「花が咲く。」に比して「あれ、あんな花が  
咲いている。」と言った方がいっそう対象界に措定した言い方にな  
っていることが知られよう。（『古今和歌集全評釈』上P273）

と述べられている。「なくなり」「ぞなくなる」の表現は古今集以下数  
多くあり（古今10、後撰2、拾遺8、後拾遺9）、

しるたへの雪ふりやまぬ梅が枝に今日ぞ鶯春と鳴くなる（兼盛集  
192）

片岡の朝の原をうち来れば山ほととぎす今日ぞなくなる（延喜十  
三年五月十三日亭子院歌合48）

などもあり、常套的な言い回しと言える。

【評】 この歌は、人々を寄せつけない高い山蔭の雪深い谷間の古果

からや々と飛び出し、春を迎えた喜びの初音を挙げる鶯の声を聞くこ  
とを歌う。「初音」は用例によるとそれを聞く側で詠むのが通常で、  
この歌のように鶯の側で詠むものは稀である。経信の「水解く風の音  
にや古果なる……」と同じく、やと春を迎え、生気を取り戻し古果  
を離れる鶯の喜びを中心に詠んでいると言えよう。作者の心は「今日  
ぞ鳴くなる」の中に暗示され、鶯の心に一致した思いが余情になっ  
ている。

配列構成の面からは、前歌18の「降る白雪」の中で飛び出した鶯を  
「急ぎ出づらん」と詠んだのに対し、19では「雪降る」中から「出づ  
る」と応じ、「（山高い）古果より」「初音は今日ぞ鳴く」として場の  
変化と情況の進展を示す。それは配列上時の経過を追っているとも言  
える。

正月二日、あふさかにてうぐひすのこゑをききて、よみはべり  
ける 源兼澄

20 ふるさとへゆく人あらばことづてんけふうぐひすのはつねききつ  
と

【訳】 故郷へ帰る人が、もしいるならば言伝てよう。早くも今日鶯  
の初音を聞いたと。

【校異】 うぐひすのこゑ↓<sup>④</sup>うぐひのこゑ ふるさとへ↓<sup>④</sup>故里に  
【他文献】 惠慶集27（詞書 正月二日、あふみへまかるに、あふさ  
かこえ侍に、うぐひすのなくをき侍て）、難後拾遺（詞書 正月二  
日あふさかのせきにてうぐひすのなくをききて 歌略 あふさかのせ  
きにてうぐひすのはつねを聞て、いとおかしければよめるなり。さら  
ばあふさかにいふよとあるべし。さらさずさせる事なし。かねもりが、  
けふしらかはのせきはこえぬと、よめるはみちのくにはいとほるか  
なるところのしらかはのせきまでゆきて、みやこへつげやらん、とよ  
まれたればこそおかしけれ。これはかれをまねびたるがおとりたれば

みぐるし。猶つげまほしうはともの人ひとりして、つげにおこせんナシいとやすきことにはあらずや。

【注】抄注、存疑なし。集抄―逢坂山にて鶯をきゝて、めづらしくおもしろき心を、古郷人にも告やらまほしき心也。任国などに行時なるべし。

【語釈】ハふるさとへV「ふるさと」は片桐洋一氏によると以下の意とされる。

本来の意は、(一)自分が昔から住んでいた里の意、少し転じて(二)昔からかかわりを持っていた里の意、さらにそれから(三)昔、都のあった所というような意にもなったが、根源はいずれも同じで、昔かかわりがあったけれども、今は、もう過去のことになつてしまつた里という意に尽きるといっていい。(歌枕歌ことば辞典)

しかし、このように故里との関わりは「過去」のことであるにしても、実際に詠まれる場合、

郭公なくこゑきけばわかれにし古里さへぞ恋しかりける(古今夏146 不知)

打返し見まくぞほしき故郷のやまとなでしこ色やかはれる(後撰恋四796 不知)

古里を恋ふるたもともかわかぬに又しほたるあまも有りけり(拾遺 雑恋1246 恵慶)

思ふ人ありとなけれどふるさとはしかすがにこそ恋しかりけれ(後撰 羈旅517 能因)

のように、単に無縁な所とされるのではなく、むしろ離れていることによつて、恋しく思われる所として詠まれるのである。だから、故里にことづてを頼むということも、たとえば、

古郷に行く人もがなつげやらむしらぬ山ちひとりまどふと(新古今 哀傷814 後一条院中宮威子)

でも、詞書によると威子が死後に人の夢に現われて、現世を故郷として望郷の思いを訴えようとしているのである。一方、この「故里」と

される具体的な地名を古今集以来見ると、三代集では奈良・吉野が多く、後拾遺集に至つて京の都を指す場合が増している。そして20の場合も、逢坂での詠で都には程近いのだが、故里の語義・用法からすると、京の都への望郷の意が読み取られることになる。

△ことづてむV「言伝て」は、我が身の思いを他に訴え伝えたい、という場合と、我が思う人の便りを期待する、という二通りに詠まれる。前者の例としては、

やよやまで山郭公事づてむ我世中にすみわびぬとよ(古今 夏152 三国の町)

ことづてむ都のかたへ行く月にこのしたくらく今ぞまどふと(新千載 離別748 実方)

があり、後者の例としては、  
山がつかきほにはへるあをつづら人はくれどもことづてもなし(古今 恋四742 寵)

秋のよに雁かもなきて渡るなりわが思ふ人の事づてやせし(後撰 秋下356 貫之)

などがある。20の場合は一応前者に属すると言えるが、こうした詠み方で詠者の望む言伝ての内容は、前掲二首では我が身の不遇感不幸感だが、ほかにこの分類に属する歌を挙げると、

こひしくは事づてもせむ帰るさのかりがねはまづ我が宿に鳴け(後撰 離別・羈旅1318 不知)

ふるさとのならしのをかに郭公事づてやりきいかにつげきや(拾遺 雑春1077 大伴像見)

あまとぶやかりのつかひにいっしかもならのみやこにことづてやらん(拾遺 別353 人まろ)

などがある。このうち「人まろ」詠は詞書に「もろこしにて」とあり、結局この三首共に望郷の思いを訴えようとしていると読み取ることができるとすると、前掲二首も含めて、詠者が「言伝て」を望むことを詠みこむ場合は、何かしら満たされない思いがあり、それを訴

えようとする場合が多いと言えそうである。

△今日鶯の初音ききつと▽これに最も近い措辞の歌としては、次の二首が挙げられる。

春の立つけふ鶯のはつこゑをなきて誰にとまづきかすらん（続千載 春上9 躬恒）

宿近くうゑてし花のかひありてけふ鶯の初音をぞきく（輔尹集39）  
「初音聞きつ」に限れば、「時鳥」の歌だが、

時鳥おもひもかけぬ春なげばことしぞ待たで初音ききつる（後拾遺 春下162 定頼）

待つ人に語り伝へむ時鳥まだ春ながら初音ききつと（下野集172）  
「鶯」では、

花の木をうゑしもしるく春くればまづ鶯のこゑを聞きつる（道済集75）

春こばと契しことをまつほどにけさ鶯のこゑをききつる（同集120）  
に近いほうだろう。これらを通して見られるのは、その声を早くに聞けたことへの喜びと言えらる。20の場合、逢坂の関で鶯の初音を聞けたとは、逢坂が京より東にあり、春は東からやってくるとの観念から、京よりも早くに初音を聞けたと、その喜びを言っていることになるだろう。

【評】 語釈で述べたように「故里」への「ことづて」は伝統的には、現在の我が身への不幸福感や、望郷の悲しみの訴えとして詠まれて来た。しかし、この歌の下句には京より早くに鶯の初音を聞くことができた喜びが表現されていると見られ、伝統的用例に従って20を理解しようとする、上句下句には大きな断絶を見ざるを得ない。つまり、上句から窺える望郷の愁いと、下句の鶯の初音に接した喜びとは、一首の中でどのように結びつくのかという点が問題となるのである。

そうした点から「難後拾遺」の言う批判も関わりがあると見られる。つまり20の歌が、

たよりあらはいかで都へつげやらむけふ白河の関はこえぬと（拾

#### 遺 別39 兼盛

のように、京から遠隔の地であるならばとにかく、逢坂の関では表現が大げさだといふのである。それは前述のように下句にこめられた詠者の心と不釣合だとも言えるが、結局二通りに考え得るように思う。

つまり、まず第一には上句の伝統的意味を断ち切り、下句にこめられた喜びを、そのままに京の人に知らせようというのが詠者の真意である場合。第二には上句の大げさとも言える措辞が、京にたとえ距離的に近くても、詠者の心理に即した表現なのであり、下句との矛盾はそのまま詠者の屈折した心理の現われと見る場合である。前者は後拾遺集の三代集に対する革新性の現われとも言え、又後者は京を「故里」とする後拾遺集の特徴の現われとも言え、どちらも可能性はあると思われる。しかし、恵慶集では20の同時詠と見られる次の歌が続いている。

せきもりにくちかためてぞ我はゆくなきつとつぐなやまのうぐひす（恵慶集28 私家集大成翻刻本文は四句「なきつとつくる」だが、「恵慶集 校本と研究」（熊本守雄 桜楓社 昭和53年刊）によって改めた。）

この歌で「なきつ」の主体は鶯とも取れるが、むしろ詠者自身なのではないだろうか。逢坂の関を越え、いよいよ京の都から離れるという実感にとらわれた作者が、多少感傷過多気味にも思わず泣いてしまったというのを隠そうとしているのが、この歌ではないだろうか。そのようにこの歌を読み取り得るならば、20の場合も、京を「故里」として強く執着しつつ、折からの京よりも早く鶯の初音に接し得た喜びに言寄せて消息を送り、京とのつながりを断たないようにすることによって、望郷の愁いを軽くしようというのが作者の真意ではないだろうか。

配列面で前歌19との関連を見ると、19が冬の間馴染んでいた「古巢」を飛び出し、「今日」「鳴く」のに対し、20は「聞く」ということで、「今日の鶯の初音」という同一の事柄に対して、主体を鶯から人へと



転換していると言える。

選子内親王いつきときこえけるとき、正月三日上達部あまたま  
るりて、むめがえといふうたをうたひてあそびはべりけるに、  
うちよりかはらけいだとよみはべりける

21 ふりつらんゆききえがたき山ざとにはるをしらすうぐひすのこ  
ゑ

【訳】 降り終わったらしい雪がまだ消えにくく残っている山里に、  
春を知らせるのはこの驚の声だよ。

【校異】 あそひはへりけるに<sup>ラ</sup>あそひけるに ふりつらん<sup>ラ</sup>あそひ  
りつもの<sup>ラ</sup>あそひけるに<sup>ラ</sup>あそひけるに

【他文獻】 選子内親王集Ⅱ1(詞書 むつきのふつかの日、人々あ  
またまありて、むめがえにといふ歌をうたひしをりに、人に内よりか  
はらけさして 初句「ふりつもの」二句「ゆきゝえやらぬ」かへし  
衛門かみ<sup>朝忠</sup> うぐひすのこゑなかりせば雪きえぬ山里いかではるをしら  
まし)、難後拾遺(詞書 選子内親王のいつきとまうしける時、ひと  
くまありむめがえとまうすうたをうたひけるに、初句「ふりつらん」  
このうたはもじかきたがへたるにやあらん、なぞつらんとはねし<sup>ナシ</sup>ふ  
りつものか)。

【注】 抄注—詞云選子内親王イツキトキコエケルトキ、イツキトハ齋  
院也。齋宮ヲモイフ。クハシクイフニハ齋院ヲバイツキノ院トイフ。  
又カモノイツキトモイフ。齋宮ヲバイツキノ宮、又イセノイツキトモ  
イフ。又云、正月三日上達部アマタマキリテ、ムメガエトイフ歌ヲウ  
タヒテアソビハベリケルニ、催馬楽云、ムメガエニキルウグヒスハ  
ルカケテナケドモイマダユキハフリツツ、是梅枝歌也。集抄—心は明  
也。齋院の御所を山里にと読也。存疑なし。

【語釈】 ハふりつらん<sup>ラ</sup>諸本「ふりつもの」とするが、「難後拾遺」  
で特に「ふりつらん」とある本文への疑問を述べているので、逆にそ

のようにあったと考え、底本文に従う。しかし、この本文での例歌  
は見出せない。「降り積もる」なら、

いつのまにふりつもるらんみよしの山のかひよりくづれおつる  
雪(後撰 雑三 1236 源昇)

などある。「つらん」は「現在に近い時点で完了したと思われる事実  
を推量する意を表す。……てしまっているだろう。……ただろう。(古  
語大辞典)小学館)とあり、20の場合は二句の「雪」に連体修飾で続  
いていると思われる。しかし、八代集中で「つらむ」を含む歌につい  
て見ると、多くは「や」や「か」の係助詞、または疑問の副詞に伴わ  
れるか、「らむ」が終止形になって、いずれも「つらむ」で切れる形  
になっている。だから初句が選子内親王集Ⅱのように「降り積もる」  
ではないかとの疑問は残る。もっとも「源氏物語」など散文の地の文  
章での「つらん」には連体修飾も少なからず見られ、あるいはこの初  
句は、散文的表現だと言えるのかもしれない。一応底本の形で「今は  
降っていないが積もっている雪から想像すると、ほんの少し前までは  
降り続けていただろうと思われる雪が……」と解すことにする。

△雪消えがたき△「消えがたし」は類似語として「消えあへず」「消  
えがて」「消え残る」「消えやらす」等があるが、客観的に雪が残ってい  
る事実だけでなく、特に消えようとしても消えないという雪の深さや  
寒さを強調し、そうした地とは人々の行き来がまれない所であることを  
も暗示し、続く「山里」に響いている。用例には次のものがある。

山深み雪消えがたき里人は滝の音にや春をしるらむ(永承六年正  
月八日庚申六条齋院祿子内親王歌合13 式部)

△山里△この歌では齋院の居所を指すが、後拾遺集の中でも注目すべ  
き語。6の評、7の語釈でもすでに述べたように、古今集以来、人も  
通わない寂しい所とされる。特に冬の山里は、

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば(古今  
冬35 宗子)

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひ消ゆらむ(古今

冬 328 忠岑)

のように、そこに住む人にとって自然の厳しさ、孤独の心細さとの戦いに消え入るようであるとされ、それだけ春に対しても、

春や来る人やとふとも待たれけりけさ山里の雪をながめて (後拾遺 冬410 赤染衛門)

のように切実に待ち望まれることになる。

山里の鶯としてはまず、

春たてど花もにははぬ山里はものうかるねに鶯ぞなく (古今 春上15 棟梁)

が挙げられるが、これでは鶯は訪れても花はまだ咲かず、春めいた明るさはいまだしと感ぜられており、

山里の梅の園生に春立てばこつたひくらす鶯の声 (好忠集1 372)

鶯の声きそめて山里に春日くらしつ花のかけにて (道済集286)

などになると、鶯も花の咲くことと共になって、春らしさの一環として賞せられている。しかし、

山里の垣根に春やしるからん霞まぬさきに鶯のなく (千載 春上6 隆国)

山里にする人もがな鶯の鳴きぬと聞かば我に告ぐべく (六帖 第二 981)

鶯のねこそはるかに聞ゆなれこや山里のしるしなるらん (経信集 15)

鶯の声絶えずなく山里に春は心をやらぬ日ぞなき (永承五年二月 三日庚申六条齋院祓子内親王歌合4 小馬)

など特に後拾遺集成立に近い時代になる程、霞に先立つ鶯の山里への訪れや、鶯の声そのものによって山里に心惹かれることも歌われている。

△春を知らするV21以前にこの表現は見出せない。鶯の声によって人が春を知るということは、すでに

鶯の谷よりいづる声なくは春くることを誰か知らまし (古今 春

上14 千里)

とあり、「春を知らする」はこれの変形と言えるだろう。選子内親王集IIで21の返歌とされる

鶯の声なかりせば雪きえぬ山ざといかで春をしらまし (拾遺 春10 朝忠)

のほうが古今14に近い表現と見られる。が、「春を知る」ことを、人から鶯にまで遡れば、

花さかぬときはの山の鶯は霞をみてや春を知るらむ (新千載 春上26 能宣)

となる。そこから21のように人が春を知ることまでの過程を含めて詠めば、

音に鳴きて人につげつる鶯のなれはいかでか春をしるらむ (続後拾遺 春上12 不知)

となる。21はその過程の結果を端的に表現し、古今14に対して鶯の声を積極的なものに意味付けした表現をとったと言えよう。

△鶯の声V詞書によれば、催馬楽の「梅が枝」を指す。

梅が枝に 来るる鶯や 春かけて はれ 春かけて 鳴けどもい

まだや 雪は降りつつ あはれ そこよしや 雪は降りつつ (催馬楽 梅枝)

催馬楽で雪の中の鶯が歌われるため、その歌声が雪の残る御所への春の訪れであるとして、催馬楽の内容に合わせつつ、訪れた人々への挨拶をこめて表現したもの。残雪の鶯については18の評を参照。それらと比較すると21は単に雪の中で鳴くとか、花を待つというより、積極的に春の訪れを告げようとするものとして点で特色がある。

【評】 部立・配列の点から鶯を詠むことを中心とする歌として配置されており、残雪の深い中で鶯の声によってやっと訪れた春を喜ぶ歌ではあるが、既述のように挨拶性の濃い歌である。したがって上句の山里の雪深さも、下句の鶯の積極的役割も、山里にいる人が客人を迎える立場での謙遜と感謝の意が多少誇張されて反映していると見られ

る。いわば人事的要素が自然の描写に伝統を一步越えさせているとも言えよう。それが現実の自然を歪めているか、あるいはこれ以前の歌より一層描写に写実性が益すことになったかはにわかには決せられない。しかし、いずれにせよ、残雪の鶯としてはその描き方に一つの新しい味もたらされたとは言えよう。

さて、この歌は選子内親王集によれば「むつきのふつかの日」の歌とされるものを、後拾遺集では「正月三日」としている。それは直前の20が「正月二日」の歌なので、選者が意識的に一日進めたのではないかと思われる。ここに後拾遺集の暦日配列の重視という方針を見ることが出来る。又、歌の内容について前歌との関わりを見ると、人々の馴染み深い「故里」への思いから、むしろ人寂しい山里へと場を移すが、どちらも人懐かしい思いである点変わらない。下句では「今日鶯の初音」を聞いたという事実に対し「春を知らず」と意味づけをし、一步進めている。

付記 本稿は「昭和学院短期大学紀要」第18・19・20の各号に掲載し

た「後拾遺和歌集私注」1・2・3に続くものである。